

電業特報・プチ特集／2020.12

地方の工業化と電化を牽引した近代製糸業の歴史 その典型的な事例を求め岡谷市蚕糸博物館を訪問 ～電化の推進役は製糸業向けの水力発電～

(取材・構成／本紙編集部)

写真1 / 1936(昭和11)年に製糸業者が寄付した旧岡谷市役所



☆製糸業が牽引した機械化と地方の電化

明治時代前半の文明開化期において、日本が目指すべき目標と位置付けた西欧諸国からの最大の輸入品は、端的には近代化に不可欠な各種の社会制度、蒸気機関(動力)をベースとする近代工業にまつわる各種機械技術、さらには「灯り」(ガスや電気)の導入だったといえるだろう。

それらの迅速な輸入・移入こそが、西欧諸国を軸とする文明国への仲間入りを手っ取り早く達成するために不可欠な道と定め、日本は国を挙げて邁進すること

になったのだ。

一方でその資金源ともなる、日本から西欧に向けた当時最大の輸出品とはといえば、上質で安価な「シルク(絹糸)」だった(その状況は昭和初期まで続く)。

1854(安政1)年に立て続けに締結された日米和親条約、日英和親条約、日露和親条約、その後の各国との修好通商条約などを通じて、横浜・長崎・兵庫・函館などの主要港湾は明治維新の前に開港、西欧諸国を軸とする当時のグローバリズムへの窓口となった。

その頃から現在の長野県、山梨県、群馬県、東京都

*本文、後略